

【実践ノート】

## むなかたの弥生時代の人々の暮らし ～田熊石畑遺跡出土の武器型青銅器「銅戈」をつくろう～

鎌田 隆徳

### 1.はじめに

子ども達の夏休みに宗像の歴史を学ぶ会の主催で、子ども達を対象にした「むなかたの弥生時代の人々の暮らし ～田熊石畑遺跡から出土した銅戈（どうか）をつくろう～」の講座をおこなった。

講座では、平成20年4月からの田熊石畑遺跡の発掘調査でわかってきた「宗像の弥生時代の様子」について話をし、出土した武器型青銅器の鋳型・鋳造という青銅器づくりの工程を模して木型とブロンズ粘土を使って「銅戈づくり」を試みた。



### 2.田熊石畑遺跡から出土した武器型青銅器

田熊石畑遺跡の発掘調査で今から2,200年前の弥生時代中期初め頃と思われる9つの墓（木棺墓）が発掘された。墓の中から葬られた人に添えられた武器型青銅器が出土した。その数は1号墓の5本をはじめとして合計15本出土した。九州の弥生時代の遺跡から出土した数としては最多である。

武器型青銅器は、中国から稲作とともに伝わってきたもので、その種類は、銅剣・銅矛・銅戈の三種類ある。（はじめは実戦的なものから後はお祭りのものへと用途が変わっていく。）

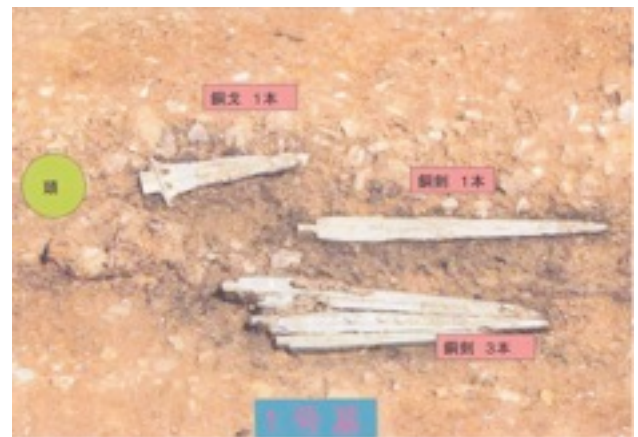


これらの武器型青銅器は、特別な者・権力者だけが持つことができるもので、権威の象徴であった。

これまで宗像地域での弥生時代については 稲作は早くより伝わっていたが（2,300年前、東郷登り立遺跡）、弥生の人々の小さなムラ々があったにすぎないと考えられていた。

ところが、多くの武器型青銅器が出土したことによって、弥生時代中期始め頃には、宗像地域においても北部九州でトップクラスの有力者がいてムラ々をまとめクニとして治めていたことがわかった。

宗像地域の弥生時代中期頃の様子とともに北部九州全体の弥生時代の社会の様子が見直されることにもなった。



### 3. 「銅戈」のレプリカをつくる

力をもつ者しか持つことができなかった武器型青銅器をつくろう

武器型青銅器の作成は、鑄型（いがた）を二つ合わせ、湯口から高温で溶かした青銅（銅とすず）を流し込み、固まったところで、鑄型を外して磨きをかけて仕上げていくという工程でつくられている。

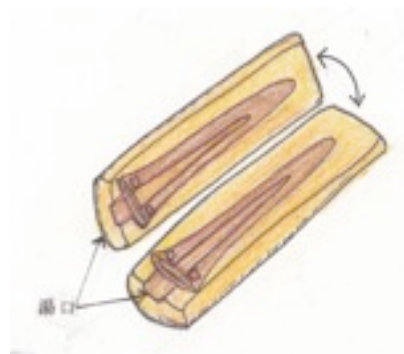
実際、青銅を溶かしての鑄造はできないので、鑄型は木型、青銅はブロンズ粘土を使用する。

田熊石畑遺跡で最初に発見された記念すべき1号墓の武器型青銅器5本（銅剣4本、銅戈1本）のうち「銅戈」をつくる。

（1）材料 ・ブロンズ粘土※1 ・木板※2  
・竹へら ・銅戈の実測図

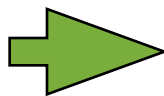
（※1）ブロンズ粘土は、色がブロンズ色で強く固まる。半乾きの時磨きをかけると光沢がきれいにでる。

（※2）木板は、桐材がやわらかくて彫りやすい。



#### 3-1. つくり方

**3-1-1. 木型づくり：**木板に原寸大の銅戈の図面（実測図）を写し取り、彫刻刀で彫り込み型をつくる。（木型は、事前に作成）



**3-1-1**



**3-1-2.**ブロンズ粘土を木型に練り込んでいく。

**3-1-3.**しっかり練り込んだら、型から粘土をはがす。

**3-1-4.** はがしとったら、型にそっていらぬ粘土をヘラで取り除く。

**3-1-5.** 形を整える。(2つの□の穴は割り箸であける。)

**3-1-6.** 形ができ

あがったら板に張り付けて完成だ。(出土した時の状態)

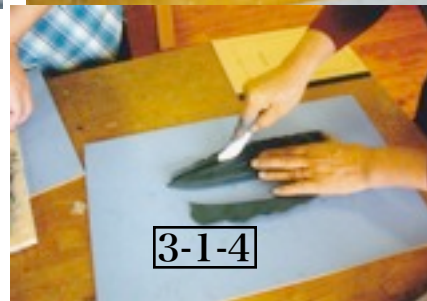
なお、上記の順で型どりしたもの2つ合わせ接合すれば両面の銅戈ができる。



3-1-2



3-1-3



3-1-4



3-1-5



3-1-6



#### 4.おわりに

私は、子ども達を対象とした郷土史講座では、「郷土の歴史を楽しく学ぶ」ことをもとに、当時の人々が使っていた道具をさわる、つくる、つかってみるなど五感を通した体験活動を入れるようにしている。

そして、体験によって子ども達が歴史に興味や関心を持ち、先人の気持ちを感じ、知恵や工夫について考えていくことを学び取らせていきたいと思っている。

講座の銅戈づくりにあたって、「宗像歴史を学ぼう会」の平松秋子さん、辻洋子さん、石村陽子さんには準備などご協力をいただいたことに感謝する。

(2009年7月19日 宗像中央公民館にて実施)

#### 参考文献

白木英敏「田熊石畑遺跡発掘現場から」「むなかた電子博物館」紀要1号.2009